



 Data	2024-54
監督・原案: エドアルド・デ・アンジェリス	
脚本: エドアルド・デ・アンジェリス / サンドロ・ヴェロネージ	
出演: ビエルフランチェスコ・ファヴィーノ / マッシミリアーノ・ロッシ / ヨハン・ヘルデンベルグ / アルトウーロ・ムゼッリ / ジュゼッペ・ブルネッティ / ジャンルカ・ディ・ジェンナーロ / ヨハネス・ヴィリックス	

👁️👁️ みどころ

私は2022年正月に放映された二宮和也主演のTVドラマ『潜水艦カッペリー二号の冒険』を見逃していたが、後に「伊503号」として日本海軍の潜水艦とされ、終戦後に「海没処分」されるという数奇な運命を辿ったイタリアの潜水艦「コマンダンテ・カッペリー二号」は1940年10月当時、どんな任務を？

「潜水艦モノ」としては『Uボート』(81年)の面白さが断トツだが、日本でもロシアでも名作が多い。イタリアの潜水艦が、ドイツのUボートとは逆に“処女のように狭い”ジブラルタル海峡を東から西に進み大西洋に出ようとしていたのは、何のため？そこで発見した輸送船を魚雷一発で仕留めたのはお手柄だが、その船籍は？ゴムボートで避難する乗組員たちの救助は？そこで見える艦長の「誇り高き決断」とは？

「潜水艦モノにハズレなし」が私の持論だが、本作はいささか・・・？

———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— *

■□■潜水艦モノにもハズレあり！本作がそれ！■□■

「潜水艦モノは面白い。潜水艦モノにハズレなし。」それが私の持論だが、残念ながらイタリア発の「潜水艦モノ」たる本作を観て、その持論が少し揺らぐことに……。第二次世界大戦中に活躍した潜水艦は、何といてもドイツのUボート。だから、「潜水艦モノ」の代表作は『Uボート』(81年)だ。私は同作が大好きで、『Uボート 最後の決断』(03年)『シネマ7』60頁)や『Uボート ディレクターズ・カット版』(97年)『シネマ16』304頁)をはじめ、テレビで放映された『Uボート ザ・シリーズ 深海の狼』(18年)(全8話)、『Uボート ザ・シリーズ2 深海の狼』(20年)(全8話)を何度も鑑賞している。

日本発の「潜水艦モノ」としては『ローレライ』(05年)『シネマ7』51頁)等の名作があるし、ロシア発の潜水艦ものとしては『K-19』(02年)『シネマ2』97頁)等がある。

また『レッドオクトーバーを追え!』(90年)も面白かった。しかし、本作は残念ながら「潜水艦モノにもハズレあり!」を実感させることに。

■□■原題は?「コマンダンテ」には2つの意味が!■□■

本作の原題は『COMANDANTE』で、これは「指揮官」のことだ。他方、「コマンダンテ・カッペリーニ」は、1939年に就航したイタリア海軍の潜水艦の名前だ。戦艦大和や戦艦武蔵の名前は日本人なら誰でも知っているが、潜水艦の名前まで知っている人はいない。日本では排水量1000トン以上をイ級、500トン以上1000トン未満をロ級に分類した上、番号で呼んでいたが、当時「三国同盟」を結んでいたドイツもイタリアもそれは同じだ。この潜水艦が日本で有名になったのは、同艦をモチーフにしたスペシャルテレビドラマが二宮和也主演で制作され、『潜水艦カッペリーニ号の冒険』として2022年正月に放映されたためだが、その物語は本作とは無関係だ。

他方、本作の原題『COMANDANTE』は「指揮官」を意味する言葉だが、本作ではコマンダンテ・カッペリーニ号の艦長であるサルヴァトーレ・トーダロ少佐(ピエルフランチェスコ・ファビーノ)の人間性(シーマン・シップ)に焦点を当てているため、潜水艦の名前以上にその「指揮官」たる艦長が主人公であることを主張していることは明らかだ。ところが、それでは日本人には本作が何の映画かさっぱりわからないため、邦題を『潜水艦コマンダンテ』とした上、『誇り高き決断』というサブタイトルまで。こりゃ丁寧といえは丁寧だが、その是非は・・・?

■□■戦局は?本艦の任務は?その達成は?■□■

本作は『Uボート』の導入部分と同じように、“ある任務”を与えられた潜水艦コマンダンテに乗組員が乗り組むまでのストーリーが描かれるが、そこではドイツ流とイタリア流の違いが顕著だから、それに注目!また『Uボート』で見た艦長と本作のトーダロ艦長の戦争観、任務観、統率観、女性観 etc.の違いにも注目!他方、『Uボート』では出航直後のハードな訓練風景が見物だったが、本作にはそれが全く登場しないので、アレレ。トーダロ艦長は潜水艦コマンダンテの性能に全幅の信頼を寄せ、「最高の艦だ」と自賛していたが、乗組員のハードな訓練がなければその長所は活かせないのでは?そんなシークエンスが全く登場しない本作に、私はまず不満ありだ!

潜水艦コマンダンテとトーダロ艦長に与えられた任務は、イギリス軍への物資供給を断つために地中海からジブラルタル海峡を抜けて大西洋に向かうこと。『Uボート』の愛好者なら、イギリス軍の守りが固い上、処女のように狭いジブラルタル海峡を無事に通過するのが至難の技であることはご承知の通りだ。たまたま『Uボート』ではそれに成功したが、さて本作は?ジブラルタル海峡を無事に通過して大西洋に出れば、いかにイギリス海軍が制海権を握っていても、海は広いから、輸送船を狙い魚雷攻撃で沈没させることは十分可能だ。さあ、コマンダンテはどんな戦略と戦術でジブラルタル海峡を通過するの?

なお、本作では「潜水艦モノ」特有の①潜水艦が潜航中に駆逐艦の爆雷攻撃にさらされ

るシーン②浮上して海上を走行中に不意に遭遇した航空機との機銃による応戦シーンが登場するが、そのリアルさは『U ボート』には到底及ばない。ましてや、潜水艦の機銃で戦闘機を撃墜させることなど、本当に可能なの？逆に戦闘機からの爆弾や機銃掃射を受けて、潜水艦がやられてしまうのが常識なのでは・・・？そう考えると、ジブラルタル海峡通過作戦に至るまでにこの潜水艦はやられてしまう、と考えるのが常識なのでは？

他方、本作が描く時代は 1940 年 10 月のことだが、その当時の戦局は？さあ、潜水艦コマンドンテは無事ジブラルタル海峡を通過して、「イギリス軍への物資輸送を断つ」という任務を達成できるのだろうか？

■□■輸送船を発見！その船籍は？艦砲は？灯火管制は？■□■

私が本作でイマイチ納得できないのは、狭いジブラルタル海峡に仕掛けられた鉄条網に潜水艦が絡まったため動けなくなった時に、1 人の乗組員が潜水夫のように艦から深海の中に出て、手作業で鉄条網を切断するというシークエンス。1940 年当時の潜水技術がどうだったのかは知らないが、生身の人間と水中電灯だけでそんなことがホントに可能なの？

それはともかく、その後、昼間は潜航し、夜は浮上しながら無事ジブラルタル海峡を通過できたのは喜ばしい限りだが、その展開も、血沸き肉躍る『U ボート』シリーズの展開に比べれば、かなりお粗末だ。そして、ついに輸送船発見！となったが、その船籍は？旗が見えないため船籍の確認ができなかったが、灯火管制をしながら航行している上、輸送船であるにもかかわらず艦砲を備えていたから、これは攻撃対象に！？そんな迷いの中、何と輸送船の方から艦砲でコマンドンテに向けて発砲してきたから、トーダロ艦長は魚雷発射を命じることに。すると、輸送船に近づくコマンドンテに向かって、海の中を漂う生存者たちの姿が 1 人、また 2 人と……。コマンドンテに、これらの生存者を救助すべき義務があるの？いやいや、それはないはずだが……。

■□■意外な展開にビックリ！この決断の是非は？■□■

『U ボート』ではもちろん、「潜水艦モノ」では、標的としている商船を発見した場合、必ず潜水艦最大の武器である魚雷を用いて攻撃するシーンが登場する。魚雷を一発食らった輸送船はたちまち沈没してしまうが、乗船していた乗組員たちの救助はどうなるの？人道上それは大問題だが、そこは戦争中。潜水艦はいち早く潜航して攻撃現場から離れなければ、駆逐艦に追いかけて逆にお陀仏になってしまうから、輸送船の乗組員の救助に構うことができないのは仕方ない。

私にとっても潜水艦モノにとってもそれが常識だが、本作に見るトーダロ艦長の決断は、ゴムボートで避難している乗組員たちを艦内に収容するというものだったからビックリ！そもそも、居住スペースが狭い潜水艦の中に、新たに避難者を収容する場所があるの？また、潜航せずに 水上を走行していたら、すぐに敵艦に発見されて砲撃を受けて、潜水艦もろとも全員死亡（犬死に）してしまうのでは？百戦錬磨のトーダロ艦長はそんなことは百も承知だが、その上でのこの判断は本当に「誇り高き決断」なの？私にはそれがかなり

疑問だ。したがって、その後のストーリー展開もなるほどと思う面が 2 割はあるものの、残りの 8 割は納得できないものばかりだ。さあ、このトーダロ艦長の決断の是非は？

■□■この潜水艦の数奇な運命にも注目！■□■

敵国イタリアの潜水艦が大胆にも浮上したまま英国海軍の前を航行中、そんな状況を確認したイギリスの軍艦がコマンダンテ号を砲撃したのは当然だが、そこでトーダロ艦長は潜航するのではなく、沈没した輸送船の乗組員を安全な港に送り届けるための航行であることを伝え、攻撃中止と停戦を求めたからすごい。しかし戦争中に、しかも現実の砲撃中に、敵艦の艦長からのそんな要請を受け入れる指揮官がいるの？私のその答えは NO だが、さて、本作では・・・？本作のパンフレットには、白石光氏（戦史研究科）のコラム『潜水艦コマンダンテ 誇り高き決断』の世界をより楽しむために」があり、そこでは①「乗組員同士の距離の近さ」②「イタリアの軍規、ドイツの軍規」等と共に、「シーマン・シップ」の解説がある。これは私の理解では、中世ヨーロッパに存在した「騎士道精神」や日本の「武士道精神」にも通じるもので、同コラムには「これは、厳しい海の世界に生きる者同士、いざというときには互いに助け合う精神とも言えるべきものだ。」と解説されており、「このように本作は、命の重さに加えてシーマン・シップについても焦点が当てられた、あまり類のない戦争映画といえよう。」とまとめられている。

他方、パンフレットの『バイオグラフィーノート』には、「2 隻の自衛武装を備えた貨物船を撃沈したのち、海洋法に従い生存者を救出し非武装の港まで送り届けた行為を、ドイツ軍潜水艦最高指揮官であったカール・デーニッツが『海のドン・キホーテだ』と揶揄したことに對して、トーダロが『私はイタリア人であり、2000 年の歴史が私の血肉となっている。これから同じことをするだろう』と反論したことが書かれている。この「論点」について本作がさまざまな問題提起をしてくれていることはよくわかるが、なぜか私にはイマイチ納得感が生まれてこない。本作に見るトーダロ艦長の行動は、生還してドイツに戻った場合は「軍法会議モノだ」と覚悟した上での行動だから、彼のその後の運命も興味深い、それ以上に興味深いのはコマンダンテの終戦後の数奇な運命だ。

日本の潜水艦が排水量のトン数によってイ級とロ級に分類されていることは前述したが、伊 500 番台は日本で製造した艦ではなく、ドイツやイタリアから譲り受けた（接収した）艦につけられた艦名（ナンバー）だから要注意！『ローレライ』の主役となった伊 507 は日本海軍が接収した 7 番目の潜水艦という意味だ。しかして、本作の主役となったイタリアの潜水艦コマンダンテは、イタリアが降伏すると日本に拿捕され、その後ドイツに引き渡されて「UIT24」と改名され、さらにドイツ降伏後には再び日本軍を接収されて「伊号第 503 潜水艦」として特殊警備潜水艦となり、1945 年の日本軍降伏後に連合国に接収され、紀伊水道で海没処分されるという数奇な運命を辿ったらしい。トーダロ艦長の価値観「シーマン・シップ」の押し付けはごめんだが、本作の鑑賞によってたくさんの秘話を勉強できたことに感謝。

2024（令和 6）年 7 月 23 日記